

12 自主共同討議報告

バンコク日本語キリスト教会牧師 中岡 直美
牧師：6年 説教塾：4年 セミナー参加：5回目

セミナー2日目の自由参加共同討論

鎌倉説教セミナー2日目は、初日の夜のセッションに引き続いて、黙想集を皆で読み進めました。そして3つの黙想をすべて読み終えた後、加藤先生より、夕食までの約1時間半は自由な時間としますという案内がありました。すでに翌日の午前中には、各自の第二の黙想を持ち寄り、検討することが予定されており、そのために自室で黙想を用意したい方は退席くださいということでした。しかし、読み進めて来た黙想がまだ自分のものとなっていないと感じる人は、自由参加の形で共同の討議を続けましょうという提案がありました。私の記憶では、ほとんど全員がその場に残り、共同討論に参加したように思います。

この共同討論の中で主に議論されたのは、イーヴァントの黙想でした。特に『（われわれは）キリストの到来を求めてもいなければ、期待もしていない人びとと同じ人間にならなければならないのである。

「キリストは、ご自分がおられないところには、来られないのである」（ルター）』という箇所について議論しました。主イエスが、ご自分を求めてもいない人のところに真っ先に来てくださる。いや、主イエスを求めてもいない人の傍らにこそ、主がおられる、ということについて、私たち説教者が、また教会が、その驚くべき福音を十分に理解しているのか、ということが議論されました。その中で、当然のごとく話し合われたことは、すでに罪赦され、救われ、主イエスのために善きことを成していきたいと願い、生きている信仰者の多くが、実のところ、自分はどこまでも罪人であるという自己認識に徹しきれなくなっているのではないかという点でした。言葉を変えて言うならば、私たちのうちに、神ではなく、自分自身を正しいとしてしまう自己義認の罪が潜んでいるという点です。しかも、その事実がありながら、私たちの多くがそのような罪の現実に気付いていないのです。ルターが語ったように、『神の面前における

（*coram Deo*）物乞い』であるという徹底的な恵みに、説教者を含む教会が生きていない現実があるのではないか。だからこそ、私たちは主イエスが罪人の傍らに自ら赴かれ、罪人を憐れむお姿を、本当に理解できていないどころか、その主イエスのお姿に、私たち自身が戸惑い、つまづいているのではないかということ、共同討論の中で厳しく見つめました。

加藤先生が、今回のセミナーでこの聖書箇所を選ばれた理由として、「このテキストは非常にシンプルであるが、非常に説教のまじめさが問われる箇所だ」と言われました。それは、一人の信仰者であり、しかし、また神の言葉を語る務めを預けられている説教者自身が『神の面前における（*coram Deo*）物乞い』であるという信仰に立っていなければ、そのゆがみが説教にも出てくるということだと私は理解しました。また、そのゆがみが説教の儀式化にもつながるという指摘も加藤先生よりありました。主イエスの、罪人に対する深い憐れみを理解できず、ファイリサイ派化してしまう信仰者の罪に、まず一人の信仰者として説教者自身が気づきを与えられ、主イエスの深い憐れみに取り扱われ、悔い改めた上で、初めて聴衆を同じ気づきに導き、そこからの悔い改めと主の赦しに続く福音を語るができるのだと受け止めました。説教のために説教者があらゆる学問的努力をすることは当然のことですが、それだけに留まらず、まず説教者自身が一人の信仰者としてどのように生きているのかという信仰姿勢が、その説教に現れてくることを、それぞれが改めて教えられるときとなりました。